

## 「ヨハネの悲劇」

マルコの福音書 6:14~29

### はじめに

今日の箇所は、福音書にしては珍しく、イエシュアの登場は名前のみ、しかも一回限りで、その言動も行動もありません。イエシュアが弟子たちを引き連れて、神の国を宣べ伝えておられた当時、ガリラヤ地方の国主であったヘロデ（ヘロデ・アンティパス）という王についての出来事です。王とは言っても時の大国ローマの支配の下で、皇帝（カエサル）からガリラヤ地方の自治権を授けられた存在にすぎない、非常に限定された権力者です。そんな彼がイエシュアについての話を耳にしたところから話は始まります。そして彼がこのイエシュアの名とその噂を聞いて、何と言ったかが今日の結論になります。この事を覚えつつ今日の内容に入ってまいりましょう。

### 1. 出来事

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:14 さて、イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、奇跡を行う力が彼のうちに働いているのだ。」

6:15 ほかに人々は、「彼はエリヤだ」と言い、さらにほかの人々は、「昔の預言者たちの一人のような預言者だ」と言っていた。

6:16 しかし、ヘロデはこれを聞いて言った。「私が首をはねた、あのヨハネがよみがえったのだ。」

ヘロデはイエシュアについての人々の噂を耳にしました。それは「奇跡を行う力が彼（イエシュア）のうちに働いている」というものでした。人々はイエシュアを「バプテスマのヨハネが…よみがえったのだ」と言い、また「エリヤだ」とも「昔の預言者たちの一人のような預言者だ」とも表現しましたが、ヘロデ自身はイエシュアについて「私が首をはねた、あの（バプテスマの）ヨハネがよみがえったのだ」と判断しました。そして次節からヘロデがバプテスマのヨハネの首をはね、彼を殺すに至った経緯が、ドラマの回想シーンのように記されています。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:17 実は、以前このヘロデは、自分がめとった、兄弟ピリポの妻ヘロディアのことで、人を遣わしてヨハネを捕らえ、牢につないでいた。

6:18 これは、ヨハネがヘロデに、「あなたが兄弟の妻を自分のものにするのは、律法にかなっていない」と言い続けたからである。

6:19 ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺したいと思いつつ、できずにいた。

6:20 それは、ヨハネが正しい聖なる人だと知っていたヘロデが、彼を恐れて保護し、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていたからである。

ヘロデにはヘロディアという妻がいましたが、彼女はなんと、もともとヘロデの兄弟であるピリポという人の妻だったのです。それを無理やりヘロデはピリポから彼の妻ヘロディアを奪ったわけです。これは「律法にかなっていない」こと、姦淫の罪にあたりと声を上げたのがヨハネでした。この声を疎ましく感じたヘロデは、その権力を悪用して彼を捕らえ、牢に閉じ込めました。しかし彼を殺そうとまではしませんでした。なぜならヘロデは自分が罪を犯していることを重々承知しており、また自分を糾弾しているヨハネが「聖なる人だと知っていた」からでした。ですから当初のヘロデは彼を殺すどころか、むしろ逆に「彼を恐れて保護し、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けて」いたほどでした。しかし一方、ヘロデの妻となったヘロディアは、ヨハネに対する強い殺意を持っていました。この記述から、ヘロデが兄弟の妻を奪ったという罪が、ヘロデだけによるものではないと考えられます。つまりヘロディアも合意の上で、共犯者として行われた罪であるということです。しかしヨハネに対する感情は、ヘロデとヘロディアではほぼ対照的であったと言えます。そしてやはり王であり夫であるヘロデの方が力関係ではヘロディアよりも上であったようです。彼女は日々ヨハネに対する殺意を募らせながらも、ヘロデの意向に反して、王に逆らってまで彼を殺そうとはしませんでした。しかしそんなある日、ヘロディアにとっての絶好の機会が訪れます。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:21 ところが、良い機会が訪れた。ヘロデが自分の誕生日に、重臣や千人隊長、ガリラヤのおもだった人たちを招いて、祝宴を設けたときのことであった。

6:22 ヘロディアの娘が入って来て踊りを踊り、ヘロデや列席の人々を喜ばせた。そこで王は少女に、「何でも欲しい物を求めなさい。おまえにあげよう」と言った。

6:23 そして、「おまえが願う物なら、私の国の半分でも与えよう」と堅く誓った。

6:24 そこで少女は出て行って、母親に言った。「何を願いましょうか。」すると母親は言った。「バプテスマのヨハネの首を。」

ヘロデの誕生日を祝う祝宴で、ヘロディアの娘が見事な踊りを披露しました。王も列席者もみなこれを見て喜び、ヘロデはこの少女に褒美を与えようとし、不用意にも誓いをもって宣言し、「何でも欲しい物を求めなさい…私の国の半分でも与えよう」とまで言ってしまいます。ここで少女はその願い事を自分で決めることをせず、母であるヘロディアに相談します。ヨハネに対する殺意に燃えるヘロディアは、ここぞとばかりに迷うことなく「バプテスマのヨハネの首を」と求め、ヨハネの死を願います。この言葉に少女もまた驚くこともためらうこともなく王にその旨を伝えに行きます。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:25 少女はすぐに、王のところに急いで行って願った。「今すぐに、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて、いただきありがとうございます。」

6:26 王は非常に心を痛めたが、自分が誓ったことであり、列席の人たちの手前もあって、少女の願いを退けたくなかった。

6:27 そこで、すぐに護衛兵を遣わして、ヨハネの首を持って来るように命じた。護衛兵は行って、牢の中でヨハネの首をはね、

6:28 その首を盆に載せて持って来て、少女に渡した。少女はそれを母親に渡した。

こうしてヘロデ王によってバプテスマのヨハネは、まるで家畜のように殺されたのでした。この出来事は、ヘロデが犯した罪と、そして彼が言い放った不用意な言葉が招いた悲劇として描かれています。私たちはこの出来事から、一体何をどう受け取れば良いのでしょうか。口に出す言葉に気をつけなさい、というような教訓的なメッセージでしょうか。あるいは不倫や殺人はいけません、という人道的にもあたりまえのような教えでしょうか。またあるいはヨハネのような死をも恐れぬ強い信仰を持つてというメッセージでしょうか。これが福音書、すなわちイエシュアが宣べ伝え、表現された「神の国」についての御国の福音の書に記されているものであるならば、絶対にそれだけではないはずです。この一見悲劇的な、悲惨な出来事として捉えられる中に秘められた「神の国」についての福音、神のご計画を考えてみたいと思います。

## 2. たとえ

ズバリ申し上げてこの出来事は、福音がどのようにして世界に広がっていくのかということを表した「型」たとえです。それは以下のようにたとえられていると考えられます。

- ①ヘロデ王…イエシュア
- ②ヘロディア…聖霊、御霊
- ③ヨハネ…イスラエルの民、ユダヤ人
- ④ヨハネの首…福音
- ⑤ヘロディアの娘…教会

まず①ヘロデ(הֶרֶדֶד)と②ヘロディア(הֶרֶדִיָּא)という二人の名前には、ヘブル語で表記するとどちらも「降りる」という意味のヤーラド(יָרַד)という動詞が隠されています。この言葉は本来、創世記 11:5 で、バベルの人々が建てた町や塔を見るために、神が天から地に「降りて来られた」という意味で使われたものです。ですからこのヘロデとヘロディアという名前には、天から降りて来られた存在である、神の御子イエシュアと、そしてそのイエシュアの上に鳩のように降りて来られ(マルコの福音書 1:10)、イエシュアを導き、ともに歩まれた御霊、聖霊の存在が表されていると考えられます。

そして③ヨハネ(יֹחָנָן)は「恵む、あわれむ」という意味のハーナン(נָחַן)を語源とする名前で、この最初の言及は創世記 33:5 です。

### 【新改訳 2017】創世記

33:5 エサウは目を上げ、女たちや子どもたちを見て、「この人たちは、あなたの何なのか」と尋ねた。ヤコブは、「神があなた様のしもべに恵んでくださった子どもたちです」と答えた。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルが故郷であるカナンに帰郷した際、兄のエサウに自分の妻子たちを紹介した時の場面ですが、ここで「しもべに恵んでくださった子どもた

ち」と訳された箇所には聖書で最初のハーナンがあります。ですからハーナンとは本来、ヤコブすなわちイスラエルの子どもたち、イスラエルの子孫、ユダヤ人とも呼ばれるイスラエルの民を指し示す言葉であると考えられます。「6:17…人を遣わしてヨハネを捕らえ、牢につないでいた。」という記述の中に、イスラエルの民がエジプトの奴隷から始まり、そしてこの当時はローマの奴隷となっていた彼らの奴隷の民、捕囚の民としての歴史が表されていると考えられます。そしてこのイスラエルの民、ユダヤ人たちの多くはイエシュアを神の御子メシアとして認めず、受け入れないばかりか、律法に逆らう罪人であると言いました。その事実が「6:18…ヨハネがヘロデに、「あなたが…律法にかなっていない」と言い続けた…」という出来事に「型」として表されていると考えられます。そしてそのヨハネから④ヨハネの首、つまり頭、ヘブル語でローシュ(שׂוֹאֵף)が切り離されます。このローシュは本来、創世記 2:10 にあるエデンの園から流れ出て全地を潤した川を指し示した言葉です。

【新改訳 2017】創世記

2:10 一つの川がエデンから湧き出て、園を潤していた。それは園から分かれて、四つの源流となっていた。

「園から分かれて、四つの源流となっていた。」ここに聖書で最初のローシュがあり、この言葉には本来、地の四隅、すなわち全世界に流れ、広がっていくという意味があると考えられます。首がはねられるという、たとえとしては非常に残酷なものです。実際に福音はもっと残酷な出来事、イエシュアの十字架の死という最も残酷な事実から、弟子たちによって全世界に宣べ伝えられ始めたのです。このように④ヨハネの首は聖書の御言葉、福音を表していると考えられます。イスラエルの民、ユダヤ人たちはイエシュアを信じず、メシアとして受け入れなかったために、彼らから福音という名の首、頭、ローシュが切り取られ、全世界の教会に与えられたのです。その事実が「6:28 その首を盆に載せて持って来て、少女に渡した」⑤ヘロディアの娘にヨハネの首が与えられたという出来事に「型」として表されていると考えられます。

また私たち教会は御霊、聖霊に導かれて歩みます。先ほど②ヘロディアが聖霊、御霊の存在を表していると述べましたが、そのヘロディアに従う娘との関係性が、「6:24…少女は出て行って、母親に言った。「何を願いましょうか。」すると母親は言った…」という出来事の中に表された御霊と教会の姿であると考えられます。また王はこの娘に「6:23…私の国の半分でも与えよう」と堅く誓いました。教会はイスラエルの民とともに「神の国」を受け継ぐ共同相続人であることが、この誓いには指し示されていると考えられます。

また話は前後しますが、ヘロデはヨハネを当惑しながらも受け入れていました。この事実の中に、イエシュアがイスラエルの民だけのために遣わされ、彼らに福音を宣べ伝えようとした事実が表されており、一方ヘロディアがヨハネを殺そうとした出来事の中に、イエシュアとは違い、聖霊、御霊には福音をイスラエルの民から取り去って教会にもたらすという目的があったということが表されているとも考えられます。

このように、バプテスマのヨハネの悲劇として描かれているこの一連の出来事の中には、イエシュアと御霊の働きと、福音がどのようにして全世界に宣べ伝えられていくかという神のご計画が「型」として表された、事実を用いたたとえであったと考えることができます。また文脈的にもこのヘロデとヨハネに関

する一連の出来事は、マルコの福音書 6:7 からのイエシュアが弟子たちを、福音を宣べ伝えさせるために遣わされた出来事と、6:30 でその宣教から帰還し、弟子たちがイエシュアにその報告をするという出来事の間、に挟み込まれるようにして記されており、この一連の出来事が福音の宣教、広がりについての何等かの意味、繋がりを持っていることを裏付けています。それはすなわちイエシュアが弟子たちに言われた最後の御言葉、

【新改訳 2017】使徒の働き

1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。

という、福音が聖霊の導きによりエルサレムから始まって、やがて地の果て、全世界に宣べ伝えられるという事実が表されたものであると考えられます。

### 3. よみがえり

【新改訳 2017】マルコの福音書

6:29 このことを聞いたヨハネの弟子たちは、やって来て遺体を引き取り、墓に納めたのであった。

首をはねられたヨハネの遺体、ここに今日のイスラエルの民、ユダヤ人たちの姿、現状が表されていると考えられます。A.D70 年にローマによって滅ぼされ、国を失った彼らは A.D1948 年にわずかながら国土を取り戻しました。しかし未だにほとんどのユダヤ人がイエシュアをメシアとして認めず、またエルサレムに神殿はなく、それどころか異教の寺院が建ち並び、何より王なるメシア、イエシュアがいません。まさに今日のイスラエルもまだ王、かしら、頭を失った状態のままなのです。頭を失って生きていられる人間などいません。つまりイスラエルは今もまだここに記されているような「墓に納めた」死んだ状態なのです。しかし今日取りあげた記述の中心は、ヨハネが殺された、死んでしまったという事実の説明ではなく、最初に述べたように、ヘロデ王がイエシュアの噂を聞いて「私が首をはねた、あのヨハネがよみがえったのだ。」と言った、という事実にあるのです。つまりこのヨハネに指し示されたイスラエルの民が、再びよみがえることが指し示された「型」たとえであり、神のご計画に沿った、あるべき姿にイスラエルが復興するということ、王なるイエシュアによって、「神の国」の福音という名の首を取り戻し、やがて必ずよみがえるという神のご計画を指し示した「型」たとえこそが、ここに記されたヨハネの悲劇と、ヘロデがイエシュアについて語った言葉に込められた意味、秘められた神の奥義であると考えられます。

このように解釈するならば、今日取りあげた、ここに記された出来事は、単なる悲劇でも記録でもなく、福音書に書き記すべき神のご計画と、その完成である「神の国」を指し示すものとなります。今やこの出来事に指し示された神のご計画は、そのほとんどが成就しました。すなわちイエシュアはイスラエルの民、ユダヤ人たちによって十字架にかかれ、弟子たちによって福音は世界中に宣べ伝えられ、教会は今日も増え続けています。ここまで成就して、その後が違うということがあるのでしょうか。ですから後はイエシュアが地上に再臨され、イスラエルの王として立ち、その国が建て上げられるのを待つばかりです。すべては聖書に指し示された神のご計画のままに実現します。信じましょう、その日はもう近いのです。